

2013

## サーフボードケース

Surfboard Case Design

AD14 下向 勝也  
指導教員 竹内 明

### 1. 研究目的

マリンスポーツの中でも、サーフィンが趣味の30～40代の為に、現状を踏まえて研究を進めた。

### 2. 調査と分析

実際に、海水浴場に調査に行き、観察、質問し以下の問題点がわかった。

- ・砂浜から海までの距離が長いため、休憩する際には堤防の上のコンクリートで休憩していた。  
→休憩場所を、求めている。
- ・ほとんどのサーファーがサーフボードの他に体を拭くタオルや、飲食物、車の鍵などをまとめて手提げ袋に入れていた。  
→荷物入れを、求めている。
- ・一番小さなサーフボードでも女性や老人は運ぶ時にゆっくりと慎重に降りていた。  
→運びやすい状態にする。

### 3. コンセプトの立案

サーフボードを運ぶためのケース自体が、椅子に変形出来る「サーフボードケース」

### 4. デザイン展開



最初の案は、ケース自体を砂浜に突き刺して使用するタイプを考えていた。しかし、ケース自体が長いので海風の影響が大き

く、倒れてしまう問題や、地面に座るのでカバーが汚れてしまう事、座り心地など、改善すべき点が多かった。



二つ目の案は、椅子のタイプにし、座り心地やの影響を改善した。ケース本体にフレームを入れ使用する際に取り出し、組み上げる。座面はケースの布を使用する。砂浜で使用するので椅子の脚の部分に布を巻くことで砂に埋もれないようにした。



三つ目の案では、背もたれを腰の部分につけ、小休憩向けに製作した。脚の設計もフレームを

交差させ、耐久性をあげた。背もたれの後ろに軽食や、飲料水、タオル等を入れるので他人からの視線を気にせずにサーフィンを楽しむことが出来る。直射日光も軽減できるので、飲食物も安心して入れることが出来る。この案では、ゆっくりと休憩が出来ない、脚のフレームを組み立てるのに少し手間がかかってしまう等の問題点があった。

### 5. 完成図



背もたれを長くしゆっくりと休めるようになり、前後両方のフレームを交差させることにより、耐久度を上げることができた。フレームで最も負担がかかる箇所は角度を調整し負担を減らすことができた。組み立てる手順も簡略化することができた

### 6. 結論

ケース自体が椅子になり休憩場所を自分で確保できるという目標は達成でき、布やフレームといった素材の選択もある程度できたと思う。しかしサーフボードの表面のデザインが沢山にあるように、このケースにも、柄や色をつけるべきと思った。また組み立てる時に、片手で組み立てられる工夫ができることさらに良かった。

### 文 献

サーフィン・スクール・オンライン

<http://www.ali-surf.com/sizechart.html>